

第三章

マーレイの招聘

マーレイの選ばれた理由

第一節 マーレイのアカデミー的性格

(1) アカデミー出身者マーレイ

マーレイは、奇しくも、フルベツキがオランダのザイストで呱呱の声をあげたと丁度同じ年、つまり1830年にニューヨーク州デラウェア郡のボンヴィナにおいて、ウィリアム・マーレイ(William Murray)とジャン・ブラック(Jean Black)の第4番目の子として生れた。彼等は共にスコットランドの出身で、デラウェア川ぞいのスコットランド人植民地に入植した。この地帯は、アメリカにおいても最も豊かな地方で、まずオランダ改革派教会(Dutch Reformed Church)に属する富裕なオランダ人達が入植したのをはじめとして英国国教会派の英国人長老派教会(Presbyterian Church)に属するスコットランド人(Seceders)、フランスのカルヴィン主義者ユグノー、フランス系ルツター教会派、クエーカー教徒、安息日厳守主義者(Sabbatarians)、安息日拒否主義者(Anti-Sabbatarians)、再洗礼派、独立教会派、メノナイト、モラヴィアン派、ダンカー教徒、スコットランド長老派の新派(New Lights)等様々の宗派に属する人々がヨーロッパの各地から、いりまじつて入植しており、宗教的にも人種的にも非常に多様性の強い地方であつたのである。⁽¹⁾しかして、このように経済的に恵まれた宗教的人種的多様性の強い地方にマーレイが育つたということは、その後の彼の性格形成に極めて大きな影響力をもつたと考えられることで彼のアメリカ人としての性格を理解する上にも非常に重要な点であると考えられるのである。すなわち、彼はニューヨークの出身者でもなければ、南部の

出身者でもなく、東部大西洋岸よりの中部出身者であつて、ニューヨーク州とニュージャージー州とが、その主要な生活舞台であり、日本に滞在した5年間を除くと1905年にラトガス大学にあるニュー・ブランズウィックの地で死去するまでの75年間の生涯のほとんどをこの三つの州内において過しているのである。

彼は、5才で小学校に入り、その後、デラウェアアカデミー(Delaware Academy)並びにデリー・アンド・フアグスンヴィルアカデミー(Dehli and Fergson - ville Academy)に進学、そこからシェネクタデー(Schenectady)にある男子のための非宗派的大学(nonsectarian institution for higher education of men)として有名なユニオン・カレッジ(Union College)の第2学年に編入学、1852年に優秀な成績でそこを卒業。卒業と同時に、オルバニー・アカデミーの助手となり、その後、このオルバニー・アカデミーで数学の教師として、約4年間つとめた後、1857年にオルバニー・アカデミーのクツク校長(Dr. Meorge H Cook)が、ラトガス大学の化学及び自然科学の教授として招聘された後をついで、⁽²⁾オルバニー・アカデミーの校長となり、7年間、このニューヨーク州でも最も有名なアカデミーの校長をつとめているのである。その後1863年に、やはりかつてのオルバニー・アカデミーの校長をつとめたことのあるラトガス大学の神学部の教授キャメル博士(Dr. William Campbell)が、ラトガスの学長に選ばれるや、⁽³⁾有能ではあつたが時代の要請に応じきれなくなつて退陣した数学及び自然哲学(Nat-

ural Philosophy)の教授ストロング (Theodore Strong) 及びヘンショウ (Henshaw) の後任として、ラトガス大学に招かれ、同様にオルバニー アカデミーの校長をしたことのあるクック教授と共に、自然科学系の諸教科を担当することになり特に数学を教えることになつたのである。ちなみにラトガス大学に招かれたちよつどの年に、マーレイは、「ニューヨーク州の大学」(The University of the State of New York)より学位(Ph. D.)を授与されているのである。

しかして、マーレイは、1873年に日本政府から招聘されるまでの10年間、ラトガスで教鞭をとつていたのであるが、この10年間こそ、横井兄弟をはじめとして、フルベツキ、フェリスの紹介により、日本人学生が続々とラトガス大学に送りこまれた時期でもあつたのである。横井兄弟や、勝小鹿らの留学の動機をみてもわかるように、又、マーレイ自身があとで語つたところからも明らかなように、⁽⁵⁾ 彼等の留学の目的は、武士としての使命観から国防のために必要な、砲術、造船、航海術、築城学に関する知識技術を身につけることであり、更にその基礎となる自然科学とりわけ、数学に関する知識を身につけることであつたのである。数学と自然科学の教授であつたマーレイが、とりわけ、日本人留学生の間に人気があつたのもこの辺のことに由来するものと考えられるのである。しかし、彼は、ひとり日本人学生の間に人気があつたばかりでなく、その優れた教授技術の故に、他の学生達からもしたわれており、学生達にマーレイの教えるコースが非常に重要なものであると、信じこませ、多くの学生達に彼の教えるコースを選択させることに成功していた人気のある教授(a successful and popular professor)であつたといわれているのである。⁽⁶⁾ 又彼は学生ばかりでなく同僚及びニューブランズウィック市民の受けも極めてよく、彼が日本に招聘されることになり、ニューブランズウィックを出発する時には様々な市民団体の代表者達が140

名もはせ参じ、盛大な送別会が開かれ、ラトガス大学の名声を内外に広めた学識ある有能な教授との別れを惜しんだといわれているのである。⁽⁷⁾ 彼がこのような人望を集めえたこと理由は、彼の持つて生れた温厚で誠実な性格もさることながら、それ以外に、二つの理由があつたと考えられるのである。その一つはラトガス大学の歴史(a History of Rutgers College 1924)を書いたデマレスト(William H Demarest)も認めているように、マーレイが、教育一般に対して深い関心をもつており、教授技術等も含む教育に関する専門的な研究を行つており、その意味においても、すぐれた教育者であり、いま一つは、かなり専門的な歴史研究をも含む、巾広い教養の持主で、ラトガス大学の同窓会並びに学生友愛会(Phi Beta Kappa)をはじめとして、様々な団体の世話役等も進んで引き受けていたこと等からも明らかなように、世話ずきで、すぐれたまとめ役的性格の持主であつた⁽⁸⁾ ことによるものと考えられるのである。前者については、彼が"Mathematics as a Part of Education"(1866)⁽⁹⁾ といつた論文ややがて"History of Education in New Jersey"(1899)⁽¹⁰⁾ といつた著書を著わしていることから容易に想像しうることであり、数学、天文学といつた特殊な専門分野の教授でありながら、日本政府の教育顧問として招聘されたことも、けつして偶然ではなかつたことがわかるのである。又後者に関しては、"Lotteries in the United States"(1890)とか"Wompun as Money Belt"(1900)⁽¹¹⁾ といつたやや専門的な歴史研究等も行つており日本から帰つて書いた"Japan"(1894, 1906改訂)とか"Development of Education in Japan"(1904)といつた日本紹介のために書かれた日本の歴史や日本の教育に関するすくなからぬ量の著作等もけつして単にもめずらしさからのみ書かれたものではなかつたことがわかるのである。しかして、衆人の認める極めて巾の広い教養に支えられ、彼は帰国後も、1879年から1889年までの10年間

ニューヨーク州の大学の理事会の書記長 (secretary of the Board of Regents of the University of State of New York) となり、州内の中等教育行政 (主としてアカデミー) と高等教育行政とに従事しているのである。⁽¹²⁾その後、健康をそこねてニューブランズウィックに引退してからも、ユニオン大学、ラトガス大学等の理事におされ、更に、1898年からなくなる1年前の1904年までは、ラトガス大学の理事会の書記長 (secretary of the Board of Rutgers College)⁽¹³⁾をつとめており、そのかたわらニューブランズウィックの神学校 (New Branswick Theological Seminary) やウエルズ記念病院 (Wells Memorial Hospital) 等とも公的なかわりを持ち、名望あるニューブランズウィック市民として、公的活動を続けていたのである。又教会人としても、ニューブランズウィックのチャペルにその肖像画をかかげられるほどには認められていたのである。⁽¹⁴⁾

すなわち、マーレイは「ラトガス大学の歴史」が物語っているように、⁽¹⁵⁾単に数学教育の専門家として優れていたばかりでなく、巾広い一般教養の持主でもあり、より広い意味における教育者としての資質と組織をまとめて行く上に必要な才能 (he was gifted with a wonderful talent for the organization of system) とをかねそなえており期待された教育行政官としての役割を十二分に果し、又名望ある市民としての役割を果たしうる力を備えた人であつたといふことができるのである。しかれば、このような彼の自然科学の分野における専門的知識と、同時に、教育者並びに教育行政官としての資質、並びに、名望ある市民としての役割を果たすに必要と考えられる巾広い均衡のとれた教養は、いかにして培われたのであろうか。

この間に答えるために、我々は、彼の受けた、二つのアカデミーにおける教育とユニオン大学における教育の性格並びに彼が教員として又校

長としてつとめていたオルバニー アカデミーの性格、更にラトガス大学の性格を吟味して見る必要があるのである。ところで、これらのマーレイを育て、又彼の活躍の舞台となつた諸々の教育機関は、実は、一つの顕著な傾向性をもつており、それは、アカデミーというアメリカ固有の中等教育機関の持つ特異な性格のうち集約的に表現されているとみることができるのである。この19世紀におけるアメリカ固有の中等教育機関の性格形成の過程に関して詳しく検討することは次の機会にゆずることとして、ここではユニオン大学の教育といい、又、ラトガス大学の教育といいアカデミーにおける教育と密接な関係をもつていたことを指摘するとともに、アカデミーのもつ性格そのものについて若干の考察を行い、それがマーレイの教育者及び教育行政官としての性格にどのように影響していたと考えられるか検討してみたいと思う。

先ず、マーレイが、学んだ二つのアカデミーについてであるが、残念ながら、デラウェア・アカデミー、及びデーリー・アンド・フアースンヴィル・アカデミーそのものがいかなる性格の学校であつたのか直接的な資料にあたつて吟味することはできなかつた。しかしこれらの二つのアカデミーは結局植民地時代に、ヨーロッパ大陸から持ちこまれた人文主義学校 (Humanistic school) とりわけ英国のラテン・グラマー・スクールが、大陸における新しい諸条件に規制され、⁽¹⁶⁾十分にその機能を發揮することが出来ずに衰退していつた後、独立戦争から、南北戦争までの間に、アメリカの土壤にしっかりと根を下しアメリカ固有の教育機関として、燎原の火の如くに、急速な普及をみせたあのアカデミーであつたことは確かなことと考えられるのである。しかも、マーレイが育ち、そこで生活した、経済的に豊かで、人種的、宗教的多様性の極めて強かつた大西洋岸沿いの中部諸州 (Middle Atlantic states)⁽¹⁷⁾こそ、アカデミーの発達にとつて最も適した肥沃なる土壤であつたといえるの

である。とりわけ、マーレイが、彼の性格形成期の大部分をそこで過ごしたニューヨーク州こそ、アカデミーの発達のもっともめざましい地域であつたといえるのである。アカデミーが、かつて、ニュー・イングランド、とりわけマサチューセッツにおいてある程度の普及をみたタウン立のラテン・グラマー・スクールや、後にアカデミーにとつてかわることになるいわゆるパブリックハイスクールと異なる第一の特色は、それが、一般に、寄付学校 (gifted school 又は endowed school) であり、設置に際して、州当局より下付される特許状 (charter) の規定に従つて、法人として組織 (incorporate) され、その多くは理事に欠員が生じた場合、理事会が自らの意志においてその欠員を随時補充する方式をとるいわゆる“自己永続的理事会”(self perpetuating board of trustees) によつて管理運営される中等教育機関であつたことである。(18)カバリーによればこのようにして、特許状の下付を受け、法人として組織されることを許されたアカデミーの数はマサチューセッツ 403 校、ケンタッキー 330 校、ヴァージニア 314 校、ノースカロライナ 272 校、テネシー 264 校であつたといわれているが、その時、ニューヨークはまさに、88.7 校、ペンシルヴァニアは 52.4 校といわれているのである。(19)

しかし、このニューヨークにおいて最も急速な普及をみたアカデミーの第二の特色は、中部諸州の人種的、宗教的多様性と密接に関係することであるが、その目指す教育は、けつして非宗教的なものではなく多くの学校が真の宗教的精神 (genuine religious spirit) の涵養を目指し、「人生の偉大なる目的」(Great End of Living) について学ばせ、「真の敬虔と徳」(True Piety and Virtue) を育成することを第一の目的としていた教育機関であつたのである。しかし、そのような宗教教育も、もはや偏狭な宗教的 (narrow denominationalism) なものでは

なくなつており、非宗教的ではないが、非宗派的色彩の濃いものとなつていたのである。(20)

このような傾向は、アカデミーが、寄付による学校基本財産を主たる財源とし、州当局から財政的援助を受けているものが少なくなかつたけれども、同時に授業料による収入にも大きく頼らざるをえないものであり、学校経営上どうしても一定数以上の生徒数、すなわち、顧客を確保する必要があつたことと関係することであつたのである。すなわちこのような学校経営上の理由からも、たとえ、アカデミー設立の主体が、ある特定宗派の教義を奉ずる宗教団体 (すなわち、a certain denomination) である場合においても、その宗派の教義を正面きつて掲げることは、もはや許されない状態となつていたのである。更に、各宗派は各宗派で厳格な教義の吟味よりは 1 人でも多くの新しい信者を獲得することの方が急務であり、その目的のために学校を手段として利用する傾向も強くあらわれはじめていたともいわれているのである。(21)

この第二の非宗派的学校への傾向性は大西洋沿岸の中部諸州のいま一つの特色、すなわち、これらの諸州が、強い宗教的動機によつて創設された植民地を母体とする北部諸州とは異なり、明らかに、経済的繁栄を第一の目的として創設された植民地を母体とする諸州からなつていたという歴史的ないきさつともかわりをもつことになり、アカデミーの第三の特色を生みだすことになつていたのである。

すなわち、このような経済的繁栄を第一の目的としていた中部植民地においては、北部植民地とりわけマサチューセッツのように宗教的等質性を保とうとする努力は、ほとんどなされなかつたため、急速な人口の増加がみられたのである。つまり、1690年には、ボストン (7,000人)、ニューポート (2,600人)、ニューヨーク (3,900人)、フィラデルフィア (4,000人)、チャールズタウン (1,100人) で、(22) 北部植民地のボストンが最も大きな

都市であり、最も経済的にも栄えていた町であったのである。

ところが1774年には、すでに、ボストン(20,000人)、ニューボート(12,000人)、ニューヨーク(25,000~30,000人)、フィラデルフィア(40,000人)、チャールズタウン(10,000人)⁽²³⁾と中部植民地のニューヨーク、フィラデルフィアが急速に膨張しはじめていたことがわかるのである。ちなみに17世紀末の1680年頃においては、英本国においてさえ人口1万人をこえる都市は、4つしかなく⁽²⁴⁾18世紀末において、人口4万をこえる都市、すなわちフィラデルフィアより大きな都市は、わずかにロンドンのみであったといわれているのである。⁽²⁵⁾

この事実一つとつても明らかのように、中部諸州における経済的繁栄とそれにもない商業都市、開港都市の発達にはめざましいものがあり、又これらの都市には商人及び職人をはじめとする航海士、測量士、会計士、法律家といった専門的職業に従事するものを多数含む、大量の新興中流階級に属する人々の発生がみられたのである。

しかして、アカデミーは、こうした全く新しい階級に属する人々の拡大再生産とその地位の向上のための手段を提供するものとみなされるようになっていたのである。

かくして、新興都市の新しい中産階級の必要を満たす学校として、各アカデミーは、比較的宗教的色彩の濃いものから、より世俗的色彩の強いものに至るまで、前者は、他宗派との布教上の競争にかちぬくために、⁽²⁶⁾又後者はより合理的な学校経営をめざして、おたがいにしのぎをけずる競争が展開され学校の顧客たる生徒を獲得するため、彼等と彼等の父兄の教育要求を満たすための努力がなされることになり、その教育内容は極めて豊かなものとなつていたのである。

すなわち、これらの学校においては、従前から(一)、古典語教育を行い進学希望者の教育的必

要を充すと同時に、(二)、卒業後実業に従事する者のために人生における誠の実業(Real Business of Living)について教え、⁽²⁷⁾

(三)、更に人格の飾りとなる教養(ornamental studies)⁽²⁸⁾をも身につけさせるための努力が重ねられていたのである。

しかして、アカデミーの教育内容は極めて巾の広いものとなり、マーレイが、1857年から1863年まで校長をつとめていた、オルバニー・アカデミーの場合をその一例としてみるならば、その教育内容は、1829年⁽²⁹⁾すでに、次のようなものとなつていたのである。

「ラテン語、ギリシャ語、英文法、地理 Kanes criticism, 代数、図形幾何学(descriptive geometry)、工学(engineering)、自然哲学、三角法、修辞学、ローマ文化(Roman antiquities)、ユークリッド幾何学(Euclid) 測量術、フランス語、アメリカ合衆国史、簿記、地図の作り方(mapping)、自然地理学(physical geography)、ギリシャ文化(grecian antiquities)、作文、雄弁術(declamation)」⁽³⁰⁾

すなわち、その教育内容は、工学、測量術等を含む実際の役に立つことを志向した自然科学系の専門教育と同時に極めて巾の広い一般教養とを与えようとするものとなつていたことがわかるのである。

更に第四の特色としては、アカデミーが初等教育レベルの教員養成の機能をも果たしていたことがあげられる。この特色は、ニューヨークのアカデミーにおいて特に顕著なものとなつていたのであるが、これは、1784年に制定された包括的な教育法によつて、ニューヨークのアカデミーが、州の統一的な教育制度の中にくみこまれ、「ニューヨーク州の大学の理事会」(Board of Regents of the University of State of New York)の管轄の下におかれるようになり、更に1805年に設けられた「学芸基金」(Lit-

erature Fund)からの多大の補助金の交付を受けるようになったこと⁽³¹⁾と密接に関係することでもあったのである。

すなわち、州からの補助金を受けその公共的性格をまずにつれて、アカデミーは、州内の初等教員養成の役割を果たすよう期待されるようになったのである。当時、ランカスター運動などの支持者ともなり教育に多大の関心を示していたニューヨーク州知事(Clinton Governor De Witt Clinton)は、アカデミー振興のためにも多大の努力をはらっていたといわれているのであるが、⁽³²⁾ それも、一つに、彼が、アカデミーの教員養成機関としての機能を重要視したためであったとさえいわれているのである。⁽³³⁾

しかし、このようなアカデミーに対する期待は、やがて、制度化されることとなり、1834年には、州の初等教員の養成を行うアカデミーに対して、州当局より特別の補助金が交付されるようになっていたのである。しかし、マーレイが、アカデミーに入学するころには、アカデミーは、制度的にも、初等教員の養成機関として、広く認められるところとなっていたのである。

その後、1844年には、後にオルバニー・アカデミーの校長となり、ラトガス大学の学長をもつとめることになったキヤメルらの尽力によりオルバニーに有名な教育実践家ページ(David Page)を迎えてニューヨーク州最初の州立師範学校が設立され、教員養成に関しての新しい動きがみられるようになってからも、アカデミーは、これら新設の公立師範学校にすぐさまとつかわられるといったこともなく、その後も教員養成の機能を果たし続けていたのである。⁽³⁴⁾

第五のアカデミーの特色としては、それが女子教育に力を入れていたことをあげることができるのである。

植民地時代のラテン・グラマー・スクールが、女子の入学を全く認めなかつたのに対し、アカ

デミーは、女子にもその門戸を開放していたのであるが、女子の入学希望者は、次第に増加し、1847年には、ニューヨーク州において、ついに、女子の生徒数が、男子のそれを上まわるといった現象さえ認められるに至っているのである。⁽³⁵⁾

しかし、以上みてきた5つのアカデミーの特色は、いずれも、マーレイの人柄の上にもおどろくほど美事に投影されていたといわざるをえないのである。

すなわち、あとでよりくわしく検討するつもりであるが、彼が自らは最も敬虔なオランダ改革派教会の教会員でありながら、自らの宗教的信念を他の人々におしつけるような態度は全くみうけられず、宗教的には極めて寛容な態度を持ちつづけていたこと、彼が、極めて実際的な人間で、経済観念の発達していた人であった⁽³⁶⁾ こと、更に実用を志向した上で数学、天文学といった自然科学の専門家であると同時に、極めて幅広い教養の持主であったこと、又教育に深い関心があり、特に女子教育に熱心であったことなどはすべてアカデミーの特色と全く軌を一にするものであったことがわかるのである。こうして、アカデミーにおいて培われたと考えられる一つの傾向性は、ユニオン大学に進学することにより、一層助長されていたものと考えられるのである。

次にユニオン大学について極く限られた資料の許す範囲内においてではあるが、検討してみたいと思う。⁽³⁷⁾

(2) アカデミー的性格のユニオン大学

ユニオン大学は、1784年に、ラトガス大学の初代学長の候補者にも上げられた、高名なオランダ改革派教会の牧師、ロメイン(Reverend Dirck Romeyn)を初代校長とし、⁽³⁸⁾ラトガス大学の最初の教師テイラー(John Taylor)を迎えて発足した⁽³⁹⁾ ユニオン・アカデミー(Union Academy)

を母体として設立された大学で、大学昇格が認められたのは、アカデミーとして発足してから10年後の1793年のことであつたのである。初代校長のロメインは、かつて、ハケンサック(Hakensack)において、スコットランドの長老派系の近代大学、アバディーン大学の卒業生ピーター・ウィルソン⁽⁴⁰⁾(Peter Wilson)と共に近代科学をも教える新しいタイプのグラマー・スクールを経営し大成功をおさめたこともある人であつたのである。

他方初代の教師テイラーは、イエール大学の出身者で、数学及び工学の基礎(a basis for early engineering)並びに航海術、測量、英文法といった当時の大学の教師としては、極めて特殊な教科を教えることのできた数少ない教師の1人であつたのである。⁽⁴¹⁾すなわち、ユニオン大学はラトガス大学とは創立当初より姉妹校ともいふべき極めて近い関係にあつたのであるが、それと同時に、それは一般にフランクリンのアカデミー(Franklin's Academy)とも呼ばれる有名なフィラデルフィア・アカデミー(Philadelphia Academy)を母体として設立され、後、ペンシルヴァニア大学として知られるようになったフィラデルフィア大学(Philadelphia college)と極めてよく似た性格をもつ大学でもあつたといえるのである。フィラデルフィア大学は、一般に広く知られているごとく、他の8つの植民地時代の大学に比べて、全く新しい二つの性格を有する大学であり、その第一の性格は完全に、非宗派的な大学で、一切の宗派的統制から解放された大学であつたことである。しかして、その第二の性格は、完全に中産階級のための大学で、実用主義的性格の強い大学であつたことである。しかして、その初代学長(provost)ウィリアム・スミス(Reverend William Smith)はピーター・ウィルソンと同様、アバディーン大学の卒業生ではやくからフランクリンの考え方に共鳴し、彼の考え方を全面的にとり入れた実際に職人達に

役に立つ教科を教える職工学校(mechanics school)の設立を提唱していた人であつたのである。又1756年に彼の提出したフィラデルフィア大学のためのカリキュラムは、アメリカの高等教育に新しい実用主義的考え方を最初に導入したのもとしてよく知られるようになっていたのである。⁽⁴²⁾ユニオン大学も又その創設のいきさつをみてもわかるように、フィラデルフィア大学と同様、アカデミーを母体とした非宗派的な大学で、スコットランドの近代大学アバディーン大学等にみられた新しい息吹きに刺激されて設立された実用主義の思想にもとづく大学であつたとみてよいように思われるのである。それは又、アメリカの土壌に育つたアメリカ固有の中等教育機関であるアカデミーの延長線上に位置づけられる新しいタイプの高等教育機関であつたとみることもできるのである。もつとも、この大学は、19世紀の後半においては、保守的の科学者ヒツコック(Laurens Perseus Hickock)といった人々に管理運営されていた時代もあり⁽⁴³⁾いつ頃まで、新しい息吹きをもちつづけていたかについては多少疑問は残るが、すくなくとも、マーレイが在学していた当時は、まだ新しいタイプの大学であつたとみてさしつかえないように思われるのである。このことは、ユニオン大学が、1829年、はやくも、古典に対して近代外国語をもつて代用することを認める「平行教科」(parallel course)の制度を確立していること等にもはつきりあらわれていることである。

第二節 マーレイとラトガス大学

(1) 宗教に対する態度

最後に、マーレイが日本に招聘される以前に多数の日本人留学生の世話をしながら、数学、天文学の教授として、10年間そこですごしたラトガス大学についてみることにする。

ラトガス大学は、1726年に、主として富裕な、しかして、上流階級に属するオランダ系

アメリカ人を中心として組織されていた「アメリカにおけるオランダ改革派教会」(the Dutch Reformed Church in America)によつて、設立された大学であり、1754年、キングズ大学(King's College)が設立された11年後の1766年にクイーン大学(Queen's College)としてニュージャージー州のニューブランズウィックに設立を許された大学である。しかし、特許状が最初に下付されたのは、1766年であつたけれども、それから4年後の1770年にこの特許状は一度書きかえられており、実際に授業を開始したのは、1771年の11月になつてからのことであつたといわれている。(45)

1770年に再交付された特許状によれば、ペンシルヴァニア大学を除く、他の8つの植民地時代に設立された大学と同様、この大学の第一の目的は聖職者、すなわち、オランダ改革派教会の牧師を養成することであり、又、神学教授を一名維持することにあつたのである。しかし、この大学は、同時に、より広い目的を持つており、その目的は特許状において、

「学問ある者の使う言葉(learned languages)、自由で有用な学芸(liberal useful arts and sciences)において、なかならず神学において青年を教育し、彼等が聖職及びその他のよき役職(good office)に従事しうよう準備するため」(46)と定められていたのである。この大学設立の目的に関して定められていた特許状の規定に関して注目すべきことは、ハーヴァード大学等の古い大学の特許状においてはみられなかつた「有用な学芸」(useful arts and sciences)という言葉が特につけ加えられていることであるが、このことは、デマレストも指摘しているごとくラトガス大学のその後の性格形成に大きな影響を与えることになつた重要な規定であるといえる。すなわち、この大学は、次の表に示すごとく、ペンシルヴァニア大学をのぞく他の植民地時代に各宗派に

よつて設立された大学同様、聖職者の養成を第一の目的とする大学ではあつたが、フィラデルフィア大学ほどではないにしても、18世紀後半に設立された大学として、その設立の当初より明らかに新しい息吹の感じられる大学として設立されたものであつたのである。

1. 1636 ハーヴァード大学(ピューリタン)マサチューセッツ
2. 1693 ウィリアム・アンドメリー大学(英国国教会)ヴァージニア
3. 1701 イェール大学(組合教会)コネティカット
4. 1746 プリンストン大学(長老派教会)ニュージャージー
5. 1753-55 アカデミーからペンシルヴァニア大学へ(非宗派的)ペンシルヴァニア
6. 1754 キングス・カレッジ(コロンビア大学)(英国国教会)ニューヨーク
7. 1764 ブラウン大学(洗礼派)ロードアイランド
8. 1766 ラトガス大学(オランダ改革派教会)ニュージャージー
9. 1769 ダートマス大学(組合教会派)ニューハンプシャー(47)

しかして、この新しさは、具体的には、次の二つの点において特色づけられるものであつたといえるのである。すなわち、その第一は、教会との関係においてみられる新しさであり、その第二は、実用的な教育を重んじ、近代科学を重視するという側面において、認められる新しさであつたのである。

まず第一の特色、すなわち、教会との関係においてみられる新しさからみていくことにする。確かに、ラトガス大学、すなわち、クイーン大学は、ホフスタッドターも指摘しているように大学の設立に際して下付された特許状において、理事会が学長を任命する場合、オランダ改革派教会の会員の中から任命されるべきことが規定

されており、未だ宗派学校としての性格をぬけだすまでには至つていなかつたのである。(48)しかし、そのようにして任命される学長は、かならずしも理事会のメンバーとなる必要も、又その議長となる必要もなかつたのである。しかして、理事会の理事の数は、4名の職権上の理事、すなわち、植民地の知事、植民地議会の議長(the president of the Council)、首席裁判官(chief justice)検事総長を含む42名とされていたのであるが、4名の職権上の理事以外の理事に関しても、何ら宗教的な条件はつけられていなかつたばかりでなく、むしろ、反対に理事総数の $\frac{1}{3}$ 以上が聖職者によつて占められてはならないことが規定されていたのである。まして、大学の教官や学生に対して、一定宗派の教義を遵守すべしといつた規定は全く設けられず、ただ、国王に対する忠誠だけが要求されていたにすぎないのである。(49)しかして、けつして最初からスムーズな協力関係が確立されていたわけではなかつたけれども、次第に、長老派教会(Presbyterian Church)、米国聖公会(Episcopal Church)等との関係が深まり、大学管理に関して19世紀の初期までには、事実上、オランダ改革派教会、長老派教会、米国聖公会といつた宗派間(interdenominational)の協力関係が、確立されていつたのである。このようなラトガス大学における各宗派の協力関係の確立は、結局、オランダ改革派教会が、この地域においてすら、少数派グループとなつており、彼等の力のみで、大学を一校維持することは、とうてい不可能な状態となつていたことに由来するものであつたといえるのである。因みに、18世紀の末から19世紀の初頭にかけて(1795~1807)財政難のため、有能な学長もえられず、学校経営は極めて困難な状態となり、グラマー・スクールの部門をのこし、大学の方の活動は一時完全に停止せざるをえなかつたのである。しかして、同じニュージャージー州にある長老派系の大学、すな

わちプリンストン大学との合併さえ唱えられるに至つていたのである。その後、関係者の努力により、1809年には、オランダ改革派教会の家に生まれ、イエール大学を卒業、オランダのユトレヒト大学にも学び、神学博士の称号を授与された高名な神学者、啓蒙思想家として、当時、宗教界、言論界、教育界、政界においておもきをなしていたリヴィングストン(William Livingston)を学長に迎えることに成功し、大学院レヴエルの学部として、神学部、医学部をも設置し、大学の急速な発展と充実がはかられるに至つたのである。事実、1815年頃までは神学部にはユニオン大学や、コロンビア大学等の卒業生(50)、医学部の方には、プリンストン大学、デイキンソン大学(51)等、他大学の卒業生も進学してくるようになり、その名声は大いにあがつたのである。しかし、依然として資金難は解消されず、神学部こそ、神学教授(prof. of theology)の他に、聖書論評の教授(prof. of biblical criticism)教会史の教授(prof. of ecclesiastical history)が置かれることになり、充実されたけれども、教養部(undergraduate)の方はいちじるしく衰退することになり、1816年から1825年まで約10年間活動を停止せざるをえない状態においやられているのである。すなわち、皮肉なことにも、パトリック・ヘンリー、ベンジャミン・フランクリン、トマス・ジエフアソン、ジョン・アダムス等と並び称せられるほどの合理主義的進歩的啓蒙思想家(52)リヴィングストンが学長をつとめた時代にラトガスは、主として財政的理由から最も神学校的色彩を強く持つ学校となつていたのである。(53)

しかし、その後、1825年、ニューヨークの富豪、ヘンリー・ラトガス(Henry Rutgers)の寄付等に支えられ、財政的基盤も確立されてくるにつれて、教養部も復活され、大学の名称もラトガス大学(Rutgers College)と改められ、面目を一新すること

になつたのである。しかし、大学の財政的基盤を確立し、大学の実質的な充実に成功したリビングストンの後継者ミレドラー (Rev. Dr. Philip Milledoler) は、⁽⁵⁴⁾コロンビヤ大学及びペンシルヴァニア大学の出身者であり、神学教授としては難があるとされ、彼が学長として選ばれた際には、学長職と神学教授職とは分けるべきだとする意見も出されていたのである。この意見は理事会において、32:28で否決され、⁽⁵⁵⁾ミレドラーは、学長と神学教授の職を兼ねていたのである。しかし、当然の結果として、神学教授としてのミレドラーの受けは、けつして、よくはなかつたのである。⁽⁵⁶⁾すなわち、少数派グループに属していたオランダ改革派教会の会員から学長としても手腕があり同時にオランダ改革派教会の神学教授としても力のある人物をうることはもはや至難の業となつていたことがわかるのである。

しかして、1840年にミレドラーの後任として、オランダ改革派教会の長老ではあつたけれども、イエール大学卒業後、コネティカットのリッチフィールド法律学校 (Litchfield law school) を出て法学者として活躍していたハスブロウク (Honorable A. Bruyn Hasbrouck) が学長として選ばれるや、ラトガス大学は、単に自らの伝統を破るだけではなくアメリカの大学そのものの伝統をも大きく破ることになつたのである。すなわち、僧籍になかつたものが大学の学長として選ばれたのは、実に彼が最初であつたといわれているのである。⁽⁵⁷⁾当然、学長の神学教授兼務の慣行はくずされ、⁽⁵⁸⁾教会は、総会 (general synod) を開き、学長とは別に、新たに神学教授を一名任命せざるをえなくなつていたのである。しかして、彼は、大学の施設を利用し、又大学の理事会からは道德哲学の教授 (prof. of moral philosophy) として、任命され、大学においては道德哲学を講ずることになつていたが、もはや大学の神学教授ではなく、神学教授としての彼の身分は、オランダ改

革派教会の総会そのものに直属することになつたのである。しかして学長自身は、憲法、国際法、政治経済、道德哲学、修辭学、古典 (be-llies letters) といつた世俗的教科を担当することとなり、⁽⁵⁹⁾他の二つの神学部の教授職の名称も、キリスト教の証しと論理の教授 (prof. of evidences of Christianity and logic) ⁽⁶⁰⁾並びに形而上学の教授 (prof. of metaphisios) ⁽⁶¹⁾と変更されているのである。かくして、ラトガス大学は、マーレイが赴任する20年ほど前から、他の古い大学にさきがけて急速に世俗化しはじめていたのである。この世俗化の傾向は1850年にハスブロウクの後継者として、法律家で、州議会の議員、州の検事総長上院議員を歴任、大統領及び副大統領候補にもおされたこともあるフレリングヒューイセン (Theodore Frelinghuysen) がえらばれた時、なお一層促進されているのである。神学部の学生は、教養部の学生とは別個に教えられるようになり、神学教授のみならず、神学部の建物の管理維持の権限も直接教会に移されることとなつているのである。⁽⁶²⁾

しかして、1863年、フレリングヒューイセンのあとをうけて、神学部で古典語を教えていたキヤメル (William Campbell) が学長におされるや、神学部は、神学校 (New Brunswick Seminary) として直接教会の管理下におかれることとなり、教授達も、大学の宿舍から、教会の調達した宿舍に移され大学の仕事からも解放されることになつていたのである。⁽⁶³⁾このようにして、神学部が分離したことにより更に大学は大巾に世俗化されることになつて、その教育内容にも大巾な変更がみられ、学長キヤメル自らが、特許状の規定にのつとるために名目的にキリスト教の証し (evidences of Christianity) 道德哲学 (moral philosophy) バイブルの言葉 (Biblical Languages) を教えることになり、⁽⁶⁴⁾これまで、神学部の教授によつて占められていた二つの教授の席には、

修辞学、論理学及び精神哲学の教授とがおかれることになつていたのである。(65) しかして、大学から神学校が分離され、財政的基盤が確立されるとともに、大学の教育内容が神学部³の分離をおぎなつてあまりあるほどに充実されるや、大学の理事会の選んだ大学の神学教授を教会が改めて教会の神学教授として任命するという慣行も無意味なものとなり、廃止されているのである。

かくして、大学は財政的基盤が確立されるとともに教会から分離していく傾向が顕著となつていたのである。しかし、なお主たる財源は寄付であり、その寄付の大部分は、教会関係を通じて募られていたため、教会から完全に独立するにはいたらず、1864年に教会の財産が12,000ドルで、大学の理事会に譲渡された際、理事会構成員の $\frac{3}{4}$ がオランダ改革派教会の教会員たるべきことが改めて規定されていることは、特に注意すべき点であるといえる。(66)

しかし、かつて、オルバニー・アカデミーの校長をつとめていたことのあるキヤメル学長の時代に、ラトガス大学に特にドラスティックな世俗化への動きがみられたことは事実であり、ちょうどその時期に、マーレイ教授が赴任し、日本人学生が多数ラトガス大学に留学していることは見落としえぬ点であるといえるのである。

(2) 自然科学に対する態度

次に、ラトガス大学の第二の特色、すなわち、早くから実用的な教育を重んじ、近代科学を重視するという側面において認められる新しさについてみることにする。特許状において、大学の目的の一つとして、青年達を「有用な学芸において」教育すると規定されていたことに関しては、すでに述べたところである。又オランダ改革派教会の教会員の中には、経済的に豊かな人々が数多くいたこと、しかし、単独で一つの大学を維持していくには、教会員があまりすくなくすぎたことについても繰り返し述べてきたと

ころである。そのため、大学の授業は、たしかに、1771年から開始されてはいたが、それは、教養部とその予備校であるラテン・グラマール・スクールのみにおいてであり、かんじんの学長、すなわち有能な神学教授を得ることは極めて困難なことであつたのである。しかして、その教養部の教官には、二名のイエール大学卒業生が任命されており、そのうち一名はフレリグヒューイセン(Frederick Frelinghuysen)といひ、いわゆる教養科目(art and sciences)と道徳(moral conduct)並びに英語の読み書き(この英語の教授こそは、オランダ系アメリカ人のアメリカ化のためのものであり、それが非常に重要視され、特に特許状においても明記されていたことは、すでにふれたところである。)を担当し、いま一人のテイラー(John Taylor)は数学及び工学の基礎(a basis for early engineering)並びに航海術、測量といつた教科を担当することになつていたのである。(67) このような教科内容をみてもわかるように、いかにラトガス大学が創立当初より「有用な学芸」を重視していたかわかるのである。それはまさに、アカデミー的なものであつたといふことができるのである。その後、四年目に卒業生を一名出したあとで、フレリグヒューイセンは、職を退き、法律家となつていたのである。それ以後は、テイラーが教養部で、又卒業生が交替でグラマール・スクールの教えるという体制が続いているのである。(68) 1784年になつてはじめて、理事会はニューブランズウィックの牧師ハーデンベルク(Dr Jacob R Hardenberg)を説得し、学長に迎えているが、しかし、それも1790年までしか続かず、その後、1793年まで再び学長なし、すなわち神学なしの時代があり、1794年にハーデンベルクの後任として、コンディクト(Rev. Ira Condict)がニューブランズウィックの牧師となるや理事会は、彼を学長代理として招き、非常勤で道徳哲学(moral philos-

ophy)等を担当してもらっていたのである。⁽⁶⁹⁾しかし、大学の主体は、神学の教授よりはむしろ「有用な学芸」を教える教養部とグラマー・スクールにあつたといえるのである。因みに、英語の文法的教授は1787年頃よりグラマー・スクールにおしよげられ、グラマー・スクールの一部門となり、1796年頃からは、グラマー・スクールからイングリツシユ・スクールとして一応分けられ、グラマー・スクールではラテン語、ギリシヤ語、英文法、地理、話し方(the art of speaking)が、イングリツシユ・スクールでは、英語の読み、書き、算術、英文法の初歩、地理、数学といった教科が教えられるようになっていたのである。⁽⁷⁰⁾

1792年に、かつて、報酬に不満のあつたテイラーが、ユニオンアカデミーに引き抜かれたあとは、教養部門にも経済的な理由から、人を得ることができなくなり、1795年には、やむなく大学はその機能を停止し、ラトガスはイングリツシユ・スクールも含めたグラマー・スクール部門のみとなり、このグラマー・スクールの卒業生は、プリンストン・コロンビアに進学せざるをえない状態となつていたのである。しかし、このグラマー・スクールは大いに充実され、特に1800年には校長として、コロンビア大学から学位(Ph. D)を授与された、有能な米国聖公会の牧師クロス(John Cross)が招かれ、ラテン語、ギリシヤ語、英文法の他に、修辞学的評論の基礎(rudiments of rhetoric criticism)、分数、小数を含む算数、三角法、測量、航海術、幾何学、自然哲学、天文学、地球儀の使い方、地理学、⁽⁷¹⁾といった日常生活に直接役立つ学科が教えられるようになり、アカデミー的な学校となつていたことがわかるのである。ちなみに、彼は女子の教育に関しても熱心であり、学校の名声は大いにあがり、⁽⁷²⁾80名ばかりの生徒がニュージャージー州内は勿論のこと、遠くペンシルヴァニア、デラウエア、ケンタツキー、テネシー州からも集まつてきていたといわれているので

ある。⁽⁷³⁾クロスは、リヴィングストン学長が就任する1年前の1810年には職を退き、大学再開とともに、グラマー・スクールは、再び、大学の卒業生すなわち神学部の学生達の手によだねられることになるのであるが、その質はけつして低下することはなかつたといわれているのである。

しかし、1808年には教養部が再開され、まず古典語の授業が復活され、次いで、翌年には、ペンシルヴァニア州でアカデミーを開いていたアドレイン(Robert Adrain)が数学の教授として招かれているのである。しかしまもなく、リヴィングストン学長の下で、大学維持のための資金の多くが神学部の充実にあてられ、⁽⁷⁴⁾教養学部は9年ほど閉鎖されているが、その間は、グラマー・スクールに多大の力が注がれていることは注意すべきことと考えられるのである。

しかし、1826年に教養学部が、再開されるや数学の教授もいちやく復活されることになり、イエール大学の卒業生で、ハミルトン大学で教えていた、数学はもちろんのこと古代近代地理、自然哲学、英文学、フランス文学、イタリア文学にも通じていたストロングがえらばれているのである。⁽⁷⁵⁾更に、1830年には化学と自然科学の教授がおかれることになり、ユニオン大学の医学部の卒業生でオルバニー・アカデミーで教えたことのあるベック(Lewis Beck)が招かれているのであるが、この二つの自然科学系の教授のポストのうち、数学の教授のポストは1863年にマーレイによつて、又化学の教授のそれは1854年に、レンセリア・ポリテクニク・インスティテユート(Rensselaer Polytechnic Institute)⁽⁷⁶⁾を卒業し、キャメル・ベック、マーレイと同様、オルバニー・アカデミーで教鞭をとり、かつ校長もつとめたことのあるクツクによつてそれぞれひきつがれているのである。更に、1841年には、近代外国語及び近代文学の教授がおかれるようになり、⁽⁷⁷⁾ま

た、1860年には英語及び英文学の教授が、1862年には、古代史、及び近代史の教授がおかれるようになり、⁽⁷⁸⁾ラトガス大学においては、その設立の第一の目的であつた神学の授業が行われなかつた時期はあつても、「有用な学芸」とりわけ、自然科学系の学科が教えられなかつた時期は全くなく、実に創立以来、絶えることなく教え続けられてきたことが明らかとなるのである。しかし、その教育内容は、まさしくアカデミー的なもの、乃至は、アカデミーの延長線上に位置づけられるものであつたといえるのである。事実、教官は、オルバニー・アカデミーをはじめとし、ユニオン・アカデミー、バスキング・リッジ・アカデミー(Basking Ridge Academy)、ダンマー・アカデミー(Dummer Academy)、その他のアカデミーから引き抜かれてきたものが多く、グラスゴー大学等のスコットランドの近代大学をはじめとして、アメリカにおいて、近代科学を教授する学校としてよく知られていたレンセリア・ポリテクニク・インスティテュート、イエール大学、ユニオン大学等において、近代科学を修めた者達によつて占められていたのである。

しかし、ラトガス大学は1863年にマーレイが赴任するまでに一世紀以上の歴史があり更に、聖職者養成を第一の目的とする学校であつたため、連邦政府の教育局等においても「主として古い型の教育を踏襲する」大学とされ、「世間の新しい要求に応ずるため少しく変更を加えた点もある」⁽⁷⁹⁾といつた程度にしか評価されていなかつたようである。しかし、実際には、その創立当初から「有用な学芸」が重視され、近代科学の成果を日常生活に役立てようとする意識は極めて強かつたといえるのである。いかえるならば、ラトガス大学には、それが富裕な上流階級に与えられた大学であるといふところからくる比較的保守的な側面と、オランダ改革派教会という少数派グループに支えられていたといふ事実からくる進歩的な側面をあわせもつていた学校であつたといふことができる

ように思われるのである。しかし、その根底には「ダッチ・アカウント」(Dutch account)という言葉が生み出されるほどのオランダ系アメリカ人の厳しく現実を直視する精神が絶えることなく流れていたことを改めて知るのである。

マーレイ在職当時の大学の陣容、すなわち、日本人留学生が多数留学していた頃の教授陣の顔ぶれをみるならば、それはキャメル学長が自ら、キリスト教の証し、道徳哲学、バイブルの言葉を教えていたのをはじめとし、まず神学部ではベルク(Rev. Dr. Joseph Fred-eric Berg)が神学、⁽⁸⁰⁾ウッドブリッジ(Rev. Samuel Merrill Woodbridge)が精神哲学、⁽⁸¹⁾ドウリトル(Rev. Theodore Standford Doolittle)が修辞学、並びに精神哲学、⁽⁸²⁾デウィット(Dr. John Dewitt)⁽⁸³⁾が聖書の言葉をそれぞれ担当していたのである。これらの教授はやがて、神学校が大学から分離されると共に、大学から去つていつたのであるが、これはマーレイの在任中に起つたことであつたのである。教養学部の教授としては、デマレスト(Dr. David D. Demarest)とベック(Rev. Theodorio Romeyn Beck)がラテン語、⁽⁸⁴⁾クロスビー(Haward Crosby)がギリシャ語、⁽⁸⁵⁾マーレイが数学及び自然哲学、⁽⁸⁶⁾クックが化学及び自然科学、⁽⁸⁷⁾フィッシャー(Gustavas Fischer)が近代外国語、⁽⁸⁸⁾フォースス(Rev. Dr. John Forsyth)が英語及び英文学、⁽⁸⁹⁾クリスベル(Rev. Cornelius E Crispell)が歴史をそれぞれ担当し、クリスベルは又アカデミー的なイングリッシュ・スクールをも含むグラマー・スクールの校長をもつとめていたのである。しかし、クリスベルはまもなく、マケルヴィ(Rev. Alexander McKelvey)によつてとつてかわられ、横井兄弟をはじめとする日本人留学生の世話をひきうけたのは、このマケルヴィ校長であつたといふことができるのである。

(3) ラトガス大学におけるマーレイの貢献

以上のような大学の伝統と同僚達の協力に支えられて、日本政府に招聘される以前に、マーレイが大学の発展のためになし遂げたこととしては、次の二つのことをあげることができる。その第一は、彼の母校であるユニオン大学において、特に活潑であった学生友愛会 (Phi Beta Kappa) の活動を、⁽⁹⁰⁾ ラトガス大学にも持ち込む際に大きな役割を果たしていたことであり、これは、彼が、いかにすぐれた組織力の持主であったかを物語ると同時に、彼がいかに学生達にしたわれた教育熱心な教授であったかを語るものである。いま一つは、より重要なことであるが、アメリカの州立大学の急速な発達をうながし、大学の教育内容の近代化に多大な影響をもたらすことになった、アメリカ高等教育史上、最も画期的な教育法である1862年のモリル法 (Morril Act of 1862) の適用をラトガス大学が受けるにあたって、マーレイが先輩であり、同僚でもあったクックとともに、重大な役割を演じていたことである。

モリル法は、周知の如く、「生活を支えるために専門的職業を含むいくつかの職業に従事している生産的階級 (industrial classes) に属している人々のため、自由で (liberal) 実際的な教育を推進するために、他の科学的並びに古典的な諸教科を排除することなく、又軍事上の学科 (military tactics) を含む農業並びに工業に関する学科を各州の議会が定める方法において教授することを、主たる目的とする大学をすくなくとも一校設置維持するため」⁽⁹¹⁾ (section 4) に制定された法律であり、明らかに、それまでは一般に中等教育レベルと考えられていたアカデミー的な教育を連邦政府の援助を通して整備充実し、高等教育程度のものに引きあげようとするためのものであったことがわかるのである。しかし、その目的のため、各州に対して、その州の選出する上院下院両院の議員各一名につき三

万エーカーの割合で国有地の交付を行いその土地の売却による収益金を大学の設置維持のための基金とすべきこと、しかして、その土地売却による収益金は、連邦政府又は州政府の発行する公債あるいは5%以上の利益をもたらす安全なもののみ投資すべきこと、更に、州内に公有地が皆無、または不十分である場合には、証券が発行されるべきことなどを規定した法律である。

この法律は、最初、1856年に、ニューイングランドの新州ヴァーモント選出のモリル上院議員 (Justin S. Morrill) によって提案された法律で、一つには、広大な西部の農業諸団体の自営農民による農業が次第に大規模なアメリカ資本主義機構のなかに吸収され、急速に企業としての農業に変質していく過程においてみられた著しい変化に適応していくために必要な新しい知識技能、すなわち、乾燥地農法等の新しい農業技術の導入や東部市場への低廉な農産物の大量供給を可能にする新しい農業経営に関する知識技術の発達とその普及といった必要に支えられたものであると同時に、二つには、東部の要求、すなわち、広大な土地を所有する西部の農民と太刀打ちすることをせまられた東部の農業諸団体の要求と、更に、急速な工業化にともなう産業界からの切実な要求に支えられたものであったといえるのである。しかし、このような西部及び東部の切実な要求を反映するものとして提出されたこの法案も、南部の強硬な反対にあい、1859年には、下院、上院をそれぞれ僅少の差で通過してはいるものの、ブカナン大統領によって拒否されるところとなっていたものなのである。因みにその反対の理由は、土地市場の供給過剰を招き、土地価格を下落させる恐れがあること、州教育の経費を国庫に依存しようとする傾向が生ずること、新しい州の名誉を傷つけるものであること、それほどの成果は期待できないこと、私人及び宗派の努力によって設立された既存の大学に悪影響を及ぼすおそれがあること、そして最後に、連邦議会には、このような補助政策を行う権限は憲法によって与

えられていないこと等であり、それはあくまでアメリカの伝統に忠実たんとするもので、この大統領の拒否をくつがえすことは容易ならざることと思われたのである。(92)

ところが、この法案は、1861年リンカーン大統領の下で再び提出されたのであるが、ちょうど州権主義者の多い南部諸州が連邦から離脱していた時でもあり、一気に議会を通過し、リンカーン大統領の署名を得て、その効力を発することになったものなのである。すなわち、この法律は、南北戦争という異常な時期の戦時立法として成立した法律であり、連邦政府の権限がとりわけ強化された時に制定されたもので、その意味においても、この法律は、画期的な教育法であつたのである。しかし、どこまでも、連邦政府の州政府に対する不当な干渉は排除されるべきであるとする原則は貫かれており、交付された土地の具体的な管理権はすべて州当局に委ねられていたのである。

従つて、各州は、それぞれの州の実情に応じて、この連邦政府からの補助を基礎として法律の定める目的にかなつた大学を新設することもできたし、又既存の州の高等教育機関に、法律に定める目的をもつた施設を付置することもできたのである。又更に、州内の高等教育機関のあるものを州のそれとみなしてそれに、法律の定める目的にそつた教育活動を行うよう委任することも、又可能であつたのである。(93) ともかく、ほとんど全ての州が、このモリル法の適用を受けることになるのであるが、多くの州においては、この連邦政府からの補助を受けるため法律に定める目的にかなつた州立大学を新設するか、あるいは、既存の州立大学に新たに施設を付置するか、どちらかの措置をとるものが多かつたのである。しかし、いくつかの州は、実際には州には属さない既存の高等教育機関をえらび法律に定める事務を委任し、それに援助を与えるという方式をとつていたのである。たとえばモリル上院議員を選出していたヴァーモント州はヴァーモント大学(The Univrs-

ity of Vermont) を、マサチューセッツ州は、工業技術に関する限り、マサチューセッツ工科大学(Massachusetts Institute of Technology) を、ニューヨークは、コーネル大学(Cornell University) を、それぞれ選んでおり、連邦政府は、州当局を通じてこれらの大学に連邦政府からの補助を交付していたのである。(94) 又コネティカット州のように、交付された国有地の一部をエール大学に下付し、大学は40名の学生を無償で教育するといつた独特の方式を採用したところもあつたのである。(95)

このような状況の中において、ニュージャージー州では、プリンストンとラトガスという二つの伝統ある大学がともに栄えており、州が新たに、第三番目の大学として州立大学を設置することは不適当であるとされ、連邦政府の補助は既存の高等教育機関に下付されることになつたのである。しかし、その候補として、プリンストンとラトガスの両大学の他に、州立の師範学校も連邦政府の補助を期待していたのであるが、師範学校は、当時いまだ、高等教育機関とはみなされてはおらず、除外され、結局、連邦政府からの補助はプリンストンかラトガスかのどちらかに下付されることになつたのである。このような動きを敏感に察知して、プリンストンでも又ラトガスにおいても、それぞれ科学を教授する学校(scientific school)を組織して補助金の交付を受けるべく準備をはじめていたのである。

ラトガスにおいては、1863年に、理事会は新しい科学課程(scientific course)を組織することを認め、次いで翌年、1864年には、それを基盤として、正式にラトガス科学学校(Rutgers Scientific School)の名称の下に、新たに科学学校を一校、大学内に設置することを決定したのである。同時に彼等は、土地の交付を議会に請願することをも決定し、そのための委員も定めているのである。ところで、このようなラトガス大学における一連の動きは、結

局、ラトガス大学の自然科学系の教授すなわちクックとマーレイの要請にもとづいてはじめられたものであり、理事会は、この二人の自然科学系の教授を中心とする教授会 (faculty) からの国有地の交付を受けるべく努力すべきであるという申し入れにもとづいて、その活動を開始していたのであり、マーレイを理解する上に見落すことのできないものであるといえるのである。しかし、このような連邦政府の援助活動の必要を認め、それを積極的に導入しようとする態度は、明らかに、フェデラリスト乃至はリパブリカン右派の流れをくむものの態度であり、極端な地方分権制と無政府主義にさえ通ずる小さな政府を主張し、それを教育の分野にもあてはめようとしていたジャクソン派のデモクラットのそれではなかったことはいまでもないことである。とまれ、1864年には、関係者の努力が実り、議会は、ラトガス大学の理事会を交付された国有地の売却による収益金の管理機関として指名し、その基金は、ラトガス科学学校の運営のために割りあてるべきことを決議しているのである。⁽⁹⁶⁾

このモリル法にもとづき、ニュージャージー州に割当てられた土地は 210,000 エーカーであったがこの土地は、すぐさま州の委員会によって 116,000 ドルで売却され、その基金から年々、5,800 ドルずつラトガス大学に配当されることになったのであるが、これをもとにして、理事会は、農場その他必要な施設設備をも整備、1864-5 年間には、新たに科学課程のためのカリキュラムを設け、課程終了者には理学士 (Bachelor of Science) の称号を与えることを決定しているのである。この科学課程の中には、農学、工学 (engineering) 並びに化学の三つのコースが設けられ、最初、これらのコースはいずれも、修業年限は三年とされたが、1870年には4年に延長されているのである。しかし、この科学課程への入学資格は、算術、代数、英文法及び地理のみとされ、⁽⁹⁷⁾ 古典は課せられなかったのである。このラトガス大学に付設されたラトガス科学学校は、1888年には、ニュ

ージャージーの州立農科大学 (State Agricultural College of New Jersey) とされて、新たに組織された理事会 (Trustees of Rutgers Collge in New Jersey) によって管理されることになっているのであるが、⁽⁹⁸⁾ ここで注意すべき点は1867年から1885年まで、すなわち科学学校が農科大学として独立分離する以前には、大学に籍を置くことの出来た日本人留学生は14名であったが、そのうち Ouska Nagateru Yasujiro と Kudo Sei Echi の2名を除く12名は、すべて、この新たに設けられた科学課程を選択していたことである。⁽⁹⁹⁾

ラトガス大学において、創設以来重視され続けてきた「有用な学芸」は、マーレイ、クックらの努力により、モリル法の適用を受けついには理学士の称号を授与しうるまでに整備拡充されることになったのである。しかし、日本人留学生の多くは、あたかも申し合わせたかのように、この新設の自然科学の課程に、ひきつけられていったのである。この辺りにも、何故にマーレイが日本人学生の間の人望があったか、その理由をみいだすことができるのである。

最後に、当事のラトガス大学の雰囲気をよくよく理解するために、いま一つの出来事についてふれておく必要がある。それは1853年に特に教員養成のための課程を設けるべきであるとする案が、理事会に提出されていることである。この提案は、いうまでもなく、そのまま理事会の認めるどころとはならず、40年も後になって、はじめてその実現をみているのである。⁽¹⁰⁰⁾ しかし、このような提案が1853年に早くも提出されていたことは、記憶されてしかるべきことと考えらるのである。この1853年という年は、オルバニーの第三教会の牧師時代に、かの有名なページ (David Page) を招いてニューヨーク州における最初の州立師範学校の設定のため尽力したこともあり、又オルバニー・アカデミーの校長として、直接教員養成にもたずさわったことのあるキャメルが、ラトガスの古典の教授として招聘されたばかりの年であり、

又、キヤメルの後任として、オルバニー・アカデミーの校長をつとめていたクツクも化学及び自然科学の教授としてラトガス大学に招かれた、ちょうどその年のことであつたのである。それから10年後の1863年には、クツクの後任として、オルバニー・アカデミーの校長をつとめていたマーレイも、ラトガスに招かれており、キヤメル学長をはじめ、彼等は、いずれもラトガスに赴任する前にかつて教員養成の機能をも果たしていたアカデミーの校長をつとめていたことのある人々であり、初等中等レベルの教育並びにその教員養成に関しても深い関心と理解をもつていた人々であつたのである。

かくして、マーレイは、ラトガス大学においても又、(一) 宗教的にも寛容でありうると共に、(二) 実用を志向する近代科学とりわけ自然科学の重要性を強調し、その専門家たりうると同時に、(三) 初等、中等レベルの教育に対しても、深い関心と理解を持ち続けることができたと考えられるのである。以上みてきたように、中部諸州に栄えていた二つのアカデミー、それからユニオン大学、更に、ラトガス大学といつた一連の環境が、マーレイを育て、かつ、マーレイの活躍舞台となつていたことをぬきにして、我々は、何故に彼が森にあてたあの書簡の中で、他のアメリカの著名な識者達にもまして、日本人の心をとらえるような回答を書きえたのか、それを理解することは出来ないのである。

第三節 マーレイと「日本の教育」

(1) 森書簡の性格

かくして、我々は、いよいよマーレイの森に対する書簡について直接検討すべき段階に到達することになるわけであるが、その前に我々は、森が、アメリカの著名な識者達にあてた書簡そのものの性格をすこしく吟味しておく必要があるように思われる。森の編集した「日本の教育」(Education in Japan)は日本の教育の将来に関して、森が意見を求めた著名な

アメリカの有識者達のうち、回答のあつた13名の人々からの書簡をまとめたもので、その序文(Introduction)に、アメリカの読者に日本の現状をよく理解してもらうため森自身が準備した52頁ばかりの日本の略史をかかげ、最後に、追加(Additional Papers)として、「日本における英語の採用について」(101) (On the Adoption of the English Language in Japan)というイェール大学のホイットニー(W. D. Whitney)教授の論文と合衆国連邦政府の教育局(長官はイートンMeneral John Eatonであつた。)によつて準備されたアメリカの教育の実態に関する報告書(102) (On Education in the United States)がつけ加えられているのである。森の書簡に対して回答のあつた13名の著名なるアメリカ人の顔ぶれは、次のようなものであつた。

ウールゼイ(Theodore D. Woolsey) 前イェール大学学長

スターズ(William A. Sterns) アマースト大学学長

クーパー(Peter Cooper) 実業家であり博愛主義者

ペリンチーフ師(Rev. Octavius Perrinchief) ペンシルヴァニアの牧師

ホプキンス(Mark Hopkins) ウィリアムズ大学学長

シエーリー(I. H. Seeley) アマースト大学教授

マコーシュ(James McCosh) プリンストン大学学長

ヘンリー(Joseph Henry) 前プリンストン大学学長

マーレイ(David Murray) ラトガス大学教授

ノースロップ(B. M. Northrop) コネチカット州教育長

エリオット(Charles W. Eliot) ハヴァード大学学長

ボードウエル (George S Boutwell)
財務長官

ガーフィールド (John A. Garfield)
下院議員

先ず、森は、これらの著名なる有識者達に対して、知的、道徳的、身体的に日本の状態を向上させるために、参考になるような見解を御教示いただきたいと述べ、更に、特に留意してほしい点として、次の五つの点をあげ、たとえその全部に対してではなくとも、そのいずれか一つに対してでもよいからお答えいただければ幸いであるといっているのである。すなわち、彼は、教育が、

- (1) 一国の物質的な繁栄にたいして
- (2) 一国の商業に対して
- (3) 一国の農業及び工業上の利益にたいして
- (4) 一国民の社会的、道徳的、身体的状態にたいして
- (5) 法律及び政府にたいして

それぞれにどのような効果と影響を及ぼすかという問題を提示し、それに対する回答を求めているのである。⁽¹⁰⁴⁾ ところでこのような問題の提示のしかた自体に、当時の我国の指導者達の教育に対する考え方及び当時彼等がアメリカの教育に対していただいていた期待といったものをうかがい知ることができるのである。それは横井兄弟ら初期の日本人留学生の渡米の動機が、単刀直入に列強の侵入にそなえるため、「偉大なる軍艦 (big ships)」を建造し、「巨大なる大砲 (big guns)」を作る術を学び、航海術を研究するためであり、⁽¹⁰⁵⁾ まさしく強兵のスローガンを実現するものであったのに対し、より深く物を考えるようになっていた彼等にとって、最大の関心事となっていたこと、それは、強兵を可能にする「物質的な繁栄」であり、いかにして富国という目標を達成するかということにあったと考えられるのである。

日本人の知的、道徳的、身体的向上を目指す教育も、まずこの国をあげてのスローガン達成のための手段として考えられたとしてむりから

ぬことといえるのである。思想の形成期に長いこと欧米で過し、その他の日本人指導者とはかなり異った物の見方、考え方をしていたと考えられる森にとっても、「一国の物質的な繁栄」が教育との関連において最大の関心事の一つとなっていたとして不思議はないのである。

このような見方は、森が、日本公使館のアメリカ人書記ランマン (Charles Lanman) に編集させ、自らの名で出版したいま一つの英語で書かれた著書「アメリカの生活と資源」(Life and Resources in America)⁽¹⁰⁶⁾ において、彼がアメリカをどう評価していたかをみることによって、うかがい知ることのできるものである。彼は、「世界中至るところで、金が偉大なる力をもっていることは事実である。しかし、アメリカ合衆国ほど利益をうることを愛し、富の獲得を高く評価する国民は他にない」⁽¹⁰⁷⁾ とみており、更に、アメリカの繁栄の原因を「実業における恒常的な成功は、主として人々の道徳的気質 (character) に依存するものである」⁽¹⁰⁸⁾ とし、更に「正直で高潔な人間はきっと隣人達の尊敬的となり、もし不幸なめにあっても、商人仲間がきっとそのような人々を助ける」といっており、波がアメリカにおける驚くべき物質の繁栄は、結局、アメリカ人の道徳的な気質の形成と深いかかわりをもつものであるとみていたことがわかるのである。マックス・ウェバー同様、森も又、ウェーバーほどうがったみかたではなかったにしろ、「プロテスタンティズムの論理と資本主義の精神」に深い関心を示していたといえるのである。しかして、彼は、「一国の物質的富をもたらす」ため、つまり、富国のスローガンの達成のためにも、日本国民の道徳的気質の抜本的な改革、すなわち教育の一大改革が必要であると考えていたことがわかるのである。

もつとも、森のこのようなアメリカに対するみかたそのものについては、多くの異論が出るように思われる。つまり、単純にアメリカ人の道徳的気質がアメリカの富を生みだしたとする

みかたには、賛成できない人々も多いであろうし、又アメリカの商人一般が果たして実際に尊敬に価する人々であつたかどうかという点に関しても、おそらく異論がでることと思われる。というのは、19世紀前半は、いうまでもなくアメリカの資本主義が商業資本主義から産業資本主義への移行期であり、それは又、かたくなな個人主義の支配的な実力闘争を許す社会であり、弱い立場にある若年労働者、婦人労働者等は過酷な搾取の対象とされていた時代でもあつたからである。しかし、公教育制度確立のための運動も、結局は、このような搾取を通して失なわれた均衡を再びとりもどす運動の一つとしてくりひろげられたものであることを思いおこすならば、⁽¹⁰⁹⁾森のような見方はあまりに単純すぎるようにもみえるからである。しかし、それはともかくとして、森がアメリカの豊かさにおどろきアメリカ人の日本人とは異つた気質にふれ、アメリカの豊かさの原因の一つを人々の道徳的気質にあるとみ、そのような気質がどのようにして涵養されたのかについて、彼が最大の関心を抱くようになったとして、無理からぬことといえるのである。かくして、彼の関心は「一国の物質的繁栄」と教育という面から、教育をとらえようとする方向に向つたものとみることができるのである。しかし、森のアメリカの有識者達にあてた手紙に関するかぎり、アメリカの教育を知るものならば、誰でも、当然問題としたであろう「宗教と教育」「共和政体と教育」との関係等については、あえてふれなかつたことに気づくのである。

英米に三年間学び、その後、更に小弁務使、中弁務使、代理公使としてワシントンに滞在、各界の名士達とも親交のあつた森が、これらの問題、すなわち、宗教と教育、共和政体と教育について無知であり、無関心であつたことは、とうてい考えられないことである。否、彼ほど深くアメリカにおける産業の発達と教育、更に政治（共和政体）と教育、及びこれら三つの関係の複雑なかわりあいに対して関心を示した

日本人は他にいなかつたとさえいえるのである。このことは、彼がランマンに編集させた「アメリカの生活と資源」、とりわけ、その「宗教生活と制度」⁽¹¹⁰⁾(Religious Life and Institutions)や「教育生活と制度」⁽¹¹¹⁾(Educational Life and Institutions)の各章をみれば明らかなことであり、彼がこれらの諸関係のかわりあいについて彼一流の見解を持つていたことは容易に想像しうるところである。

事実、宗教と教育との関係について、森が強い関心をいだいていたことは、彼が1872年つまり明治五年アメリカ滞在中に英文でものした「信教自由論」を読めば明らかである。それは彼一流の信教の自由に対する、当時においては、実に思いきつた大胆な見解の吐露であつたばかりでなく、さきにもふれたように、ジェファソン流の自然の貴族制の考えにも通ずる一つの思想に貫かれた政治論であると共に、教育論でもあつたのである。しかし、このような本格的な信教の自由の主張をめぐつて展開された政治論、教育論は、宗教、とりわけ、キリスト教に対する並み並みならぬ理解なくしては、とうてい考えられぬものであつたのである。ところで、彼は、どうしてあのように大胆な「信教自由論」を書きうるようになったのであろうか。

森がアメリカ留学中に、キリスト教に関して、トーマス・レーク・ハリス(Thomas Lake Harris)の強い影響を受けていたことは広く知られているところである。つまり、森は、留学生としてもはやイギリスに滞在することが出来なくなつた時、吉田清成、松村淳蔵、畠山義成、永沢鼎、鮫島尚信ら5名の薩摩藩留学生とともに、⁽¹¹²⁾アメリカに渡つた際、オールコツクの下でイギリス公使館の一等書記官もつとめていたことのある下院議員オリファント(Laurence Oliphant)⁽¹¹³⁾の紹介で、ハリスに会い、ハリスを頼つて、ニューヨーク